

「ノーベル化学賞を受賞して」

講師：内閣府総合科学技術会議議員、筑波大学名誉教授 白川 英樹博士



今年の全学講義は、2000年度のノーベル化学賞受賞者である白川英樹博士を講師にお招きし、高分子学会北陸支部50周年記念講演会を兼ねて、平成13年11月10日に工学部101講義室で実施された。本学学生や教職員に中学生、高校生及び市民の方々を加えて約550名が会場を埋め尽くす中、渡辺教務課長の進行で講義は進められた。荒川学長の挨拶に続いて、宮内高分子学会北陸支部長の挨拶の後、青木工学部教授による白川先生の紹介があった。

白川先生は、昭和11年のお生まれで、昭和41年3月東京工業大学大学院理工学研究科博士課程を修了後、直ちに同大学資源化学研究所の助手に採用され、昭和54年筑波大学助教授、昭和57年同大学教授に昇任され、平成12年3月に同大学を退官され（筑波大学名誉教授）現在、内閣府総合科学技術会議議員として大変お忙しい日々を過ごしておられる。

2000年度のノーベル化学賞は、白川先生、マクダイアミッド博士及びヒーガー博士による「導電性高分子の発見と開発」の業績に対して授与された。導電性高分子のきっかけとなったポリアセチレンは、他の研究者によって1958年には合成されていたが、不溶不融の黒色粉末でその構造解析や物性測定は難しかった。白川先生はアセチレンの重合反応の仕組みを調べる目的で、アセチレンの重合実験を手がけておられたところ、韓国から来ていた研究生が1967年に自分にも実験をやらせて欲しいと申し出て、実験したが目的物が合成できないという。調べてみると、フラスコの表面に薄膜状の物質ができていた。失敗の原因を探るために触媒の濃度を変えて実験し、触媒濃度を通常よりも3桁高い濃度にするとうるみ箔状の金属光沢を持つポリアセチレンができることがわかった。



1975年に東工大に講演に来られたマクダイアミッド博士が、金属光沢を持つポリアセチレンに興味を示され、翌年、白川先生は渡米してマクダイアミッド博士やヒーガー博士と共同研究することになった。ポリアセチレンに電子を引き抜く性質を有する臭素をドーピング（少量を添加）すると、電気伝導度が10万から1億倍にもなることがわかり大騒ぎになった。そして、この結果を1977年の学会で発表したことが契機となって、導電性高分子の研究が盛んに行われるようになった。

講義の中で白川先生は「セレンディピティー」という言葉を強調しておられた。この語源はセイロンのおとぎ話にあり、「偶然をきっかけにして、素晴らしい発明や発見をする能力」を意味する言葉として用いられている。偶然をうまく発明、発見に結びつけるには好奇心とそれを認める力が必要である。好奇心や認知力は教育によって育成強化できるのか、また、偶然を利用する心構えを育てる方法があるのかということについて、白川先生は「私達があることをする場合、予想される結果ばかりではなく、予想されなかった結果もすべてを観察して記録する習慣を身につけることが大切です。」と述べられた。先生はさらに「創造性とはなんだろうか、そして創造性を育むためにはどうしたらよいのだろうか。創造性とは固定観念にとらわれずに自由な発想ができることであり、創造性を育むには何事にも率直な疑問を抱き、その疑問を解き明かすように努力することが大切ではないかと思います。」と締めくくられた。先生は、この後の学生の質問にも丁寧に答えて下さった。例をあげれば、「化学教育の在り方は？」という質問に、難しい質問で困ったという顔をしながら「今の大学生からでは手遅れだと思いますが、小・中学校でもっと独創性を育てる教育が必要であると思います。」と答えておられた。最後に、増田理学部長が謝辞を述べて全学講義は終了した。

（文責：理学部教授 増田芳男）

「イスラームの歴史と現在」

講師：東京大学大学院人文社会系研究科教授 佐藤 次高博士



平成13年11月22日(木) 14時30分から約2時間にわたり、東京大学大学院人文社会系研究科教授・佐藤次高博士を講師として迎え、法文棟A160講義室において全学講義を開催した。博士の専門は、イスラーム地域の社会史であり、西アジアのイスラーム社会について、諸制度から人物・物流に至るまでさまざまな角度から分析を行ってこられた。近年では、国際的な研究プロジェクトを組織され、すぐれた成果をあげられており、このような功績によって、平成13年度、学士院賞を受賞された。

今回の講義では、日本人と中東・イスラーム世界との関わりの歴史を通じて、「イスラームの歴史と現在」についてお話をいただくことができた。博士に全学講義を依頼したのは、アメリカのテロ事件が起きる以前だったが、この事件によってイスラーム世界への関心がわが国でも高まっていた時期にこのような講義を受けることができたのは、やはり幸いと言うべきか。当日は、人文学部、法学部、および経済学部の三学部の教官や学生をはじめとして多数の受講者で大教室が埋まり、講義後も活発な質疑が行われた。

講義「イスラームの歴史と現在」の概略は以下のようであった。

1) 日本人とイスラームの出会い

鎖国していた江戸時代、中東・イスラーム情報はオランダや中国を通じてもたらされていたが、明治に入ると、今度はヨーロッ

パ経由で情報がもたらされるようになる。偏見が少なからず混入しているヨーロッパ人のイスラームやマホメットに対する認識が、日本人によるイスラーム理解の原点になったのである。19世紀末には、メッカへの巡礼をはたした日本人ムスリムも出てくるし、中国・東南アジアへの進出とともに、アジア諸国におけるムスリムの実態調査も行われるようになる。

2) 戦後のイスラーム研究

この時期、日本でもイスラーム史やイスラーム思想の研究が本格的に行われるようになる。しかし欧米の大学への留学経験者が主流であって、欧米のイスラーム研究の方法を踏襲したものであった。

3) 新世代の登場と現代イスラーム世界

1960年代以降、日本のイスラーム研究は新たな展開を見せる。欧米ではなく、中東諸国に留学し、独自に現地調査と史料収集が行われるようになる。さらに1970年代のオイル・ショックにより、原油の産出国をかかえるイスラーム世界への関心が高まる。その結果、文化人類学、社会人類学、さらには政治学などさまざまな立場・分野から、現代イスラーム世界が分析されるようになる。このような動向をふまえて大型かつ国際的なプロジェクトも1980年代以降、組織されるようになる。しかし、わが国が中東においている海外研究拠点はカイロのそれだけであって、欧米に比べると著しく貧弱と言わざるをえない。これではイスラーム世界に関する生きた情報を収集することは困難である。

(文責：人文学部教授 關尾史郎)

留学生センター・留学生課の移転

NOTICE Of Movement of International Student Center

新潟大学留学生センターと留学生課は、教養校舎のリニューアルに伴い同校舎D棟3階「下記の図を参照のこと」に3月22日(金)に移転します。

留学生センターや留学生課にかかる業務の対応は、3月26日(火)からとなります。

新しい留学生センターには、留学生と日本人との交流を目的とした「交流コーナー」や、地域住民や各種国際交流ボランティアが交流や催し物が出る「地域・国際交流促進室」を設置しましたので、おおいに利用してください。

This is to announce that ISC and ISC office will move to 3rd floor of BIDG. D as indicated below on March 22nd.

The business starts from March 26th, Tuesday.

It is advised and encouraged to use "exchange corner" and "volunteer's corner" where various volunteer groups can promote exchanges and some events.

